ど、こんな争議に出会ったら一生やめられへんなという争議がいくつかあったね。当時は社会も労働運動に対してシンパシーをもっていた。学生もシンパシーをもって、どんどん労働運動に入ってきた。

学校出てすぐオルグになられたわけですが、現場の組合員からの対応は。

当時は本部のオルグというのは、やっぱり神様みたいなとこがあってね。行くだけで会社への圧力になる。現場からは「顔見せてくれるだけでありがたい」と、よく言われた。そこで現場から逆にオルグの心得を学ぶ、そういう関係やね。

労働運動に携って要さんが一番影響を受けられた方は。

理論では中江平次郎さん（元大阪総評議長）。彼は労働学校では講師として常連でしたわ。実践では尾上文男さんとか大和田幸治さんかね。私からみたら巨人みたいな人でね。近寄りがたいというか。駆け出しの書記局員としては、労働学校の終わったあとの食事のときにいろんな話を聞かせてもらうのが楽しみやった。

言うだけではダメ、労働組合は要求して実践すること

運動として現在取り組んでいるなかで思っていることは。

パート問題でいうとね、昔から臨時工はいた。その本工化要求をしていた。まじめな組合は本工化要求をする。すると会社は団交を拒否する。それで地労委に団交拒否で申し立てると、「労働組合が影響力を強めて、組織と運動を維持するために当然出してしかるべき要求だ」という命令が出ている。パートの組織化をいうなら正社員化、短時間正社員化でもいいからそれを要求したらいい。言うだけではダメ、労働組合は要求して実践すること。たとえば労働委員会闘争を全国一斉に仕組む。チャンピオン闘争になるが、全国でかなりの単組がパートの正社員化要求を一斉に地労委に申立てたら新聞も飛びつく。パート労働法を国会に出すんだったら、それくらいの「しかけ」をしなければ。1200万人のパートの票が動くのと違いますか。それに今、使用者が労働法の規制から逃れる方法として使用者の非使用者化、労働者の非労働者化（たとえば軽急配名古屋の事件）というやり方が流行っている。本工の雇用と労働条件を守るために導入されたパートに包囲されて、今はウカウカしているとパートに置き換えられるという状況。つまりは賃下げ圧力・失業圧力の原因になっている。パートが1200万人、フリーターが300万人、派遣が200万、外国人が60万人（在日朝鮮・韓国人は除く）となると、本工は確実に少数派になっている。

労働相談という需要はたくさんある。それを労働運動がどう受けるかが課題

今後の課題は。

労働相談をやっていると、今までと違ったシンパシーが必要になる。相手に対する癒しとか自立を助けるとか、そういう気持ちがないと本当の労働相談にならない。相談に来る人は孤立無援で困窮している人が多い。解決型の相談をめざす以上、「これは労基署、これは弁護士に…」というように交通整理するだけではしかたない。連合大阪としては解決型相談をやらないかん。団交にも出かけていく、それが組織化にもつながる。相談という需要はたくさんある。それを労働運動がどう受けるかという課題ですね。

連合大阪に来てまずホームレス対策に取り組んだ。やっと自立支援法にこぎつけた。2番目に外国人労働者問題。たとえば昨年暮れには、川重の子会社でフィリピン研修生の残業代の支払い要求を解決し、40名の組織化に成功した。またエステでインドネシア女性が6人監禁状態で働かされていた。月15000円でね、1日13時間働いている。2人が相談に来て、最賃で計算して2年間分まとめて払わした。3番目はパートプロジェクト、これはなかなか進んでいないですね。

労働委員会の労働者委員としての仕事の中で感じることは。

いわゆる駆け込み訴えが多い。個別紛争解決システムもできた。「早く、安く（費用）」というのを眼目に始めたのはいいけど、逆に獲得水準が低くなってきている。解雇されて組合に駆け込んで地労委に来る。最初から和解ありきだから、クビ（解雇事件）の値段がかなり下がってきている。結局「早く、低く」となっている。良し悪しです。仮処分の場合でも、今は相場が下がっている。クビが切りやすくなっている。逆に労働組合が腹を据えた取り組みができていないということやね。全部和解を求めるという形になっている。

最後に地域合同労組に対してなにか。

現在私がやっている解決型相談活動にあっても、とりあえず相談者に組合に入ってもらって組合的手法で解決するのが早くて有効だ。その意味でも、大阪地域合同労組の存在と役割は大きい。これからもよろしく。

こちらこそよろしくお願いします。今日はどうもありがとうございました。